

ポスドク研究者、大学院博士後期課程学生等国際学会派遣プログラム	
Beyond cultural diversity—The case of migrant Japanese women writers	
氏名 洲崎 圭子	所属 基幹研究院 研究員
期間	2019 年 10 月 17 日～ 2019 年 10 月 26 日
学会・分科会名	Western Conference of the Association for Asian Studies, 2019. Contemporary Women's Literature in Japan.
場所	El Colegio de México、メキシコシティ、メキシコ合衆国
発表者名、発表形式	Susaki Keiko, 口頭発表

内容報告

1. 学会・分科会の概要

1.1. 学会について

Western Conference of the Association for Asian Studies (以下、WCAAS) は、アメリカ合衆国の学術団体である Association for Asian Studies (1941 年設立) に加盟する 9 つの地域団体のうちの一つであり、アジアを専門分野とする研究者の連絡・情報交換を目的としている。なかでも WCAAS は歴史が古く、2019 年には開催 57 回を数えた。

今回は、“Crossing Borders”の総合テーマおよび「アートと芸術」、「衝突と境界」、「経済」、「教育」、「環境と貧困」、「ジェンダー」、「知と哲学」、「言語と文学」、「移民とディアスポラ」、「ナショナリズムとポストコロニアリズム」、「宗教と信仰」、「社会とアイデンティティ」、「ヨガ」の 13 の個別テーマのもと、7 つ (アジア、中国、日本、韓国、ラテンアメリカ、南アジア、南方アジア) の地域カテゴリーに分かれ、2 日間にわたって全部で 41 の分科会が実施された。

1.2. 分科会について

報告者が参加したパネルは、「日本の現代の女性作家」と称し、報告者を入れて 3 名が発表を行い、フロアの参加者から質問やコメントを受けて討論が行われた。他 2 名の報告者からは、円地文子と大庭みな子の小説作品についての比較考察、ならびに 4 人の日本人女性作家が描いた家族像に焦点化し戦後日本の家族の変遷をたどる分析があり、それぞれ興味深い発表がなされた。

2. 本発表の内容

2.1. 発表の概要と意義

多和田葉子 (1960 生) はドイツに 30 年以上にわたって滞在し、日本語とドイツ語の二か国語で執筆する。本発表では、多和田の小説『雪の練習生』(2011) から、日本語原著に加え、著者自身がドイツ語に訳した版から訳出された英語版およびポルトガル語版を比較検討した結果、現代社会の諸課題に対する重層的な視点が同時に見いだされることとなった。また、同じ多和田の『ボルドーの義兄』(2009) では、ドイツ語、日本語のいずれの版においても、各章ごとに漢字一文字がタイトルのように付され重要な役割を果たしていることから、作家が、両言語を効果的に使いこなす様子が確認された。

多和田同様、海外滞在経験がある有吉佐和子 (1931～1984)、大庭みな子 (1930～2007) のほか、カレン・テイ・ヤマシタ (1951 生) といった日本人あるいは日本にルーツを持つ女性作家の作品においては、度重なる移動・移住経験をつうじて培われることとなった独自のテーマ展開が見受けられる。こうした女性作家たちが創り出した小説世界には、ジェンダーやエスニシティ、ナショナリズムといった視点が交差する混沌とした社会状況が描きこまれていることから、登場人物たちが言語や文化的な境界域を往来する様が前景化されることとなる。

本発表は、日本人・日本にルーツを持つ女性作家の文学作品に関し、移住や移動といった現代的な課題を結びつけた文学批評研究であり、なおかつこれまで十分に研究されてきたとは言い難い日本文

学と海外文学（翻訳版）との比較分析でもあることから、グローバルな視点を備えた女性作家研究として十分に海外への発信力を持つと考える。

2.2. 成果と課題

本学会においては、アジア各地や米国からの参加者のみならず、広くラテンアメリカの研究者らと議論する機会も多く得られたことから、報告者の従来からの研究対象であるラテンアメリカの女性作家を取り巻く状況について、改めて考察を深める良い機会となった。

分科会においては、フロアから多和田の詩作品と小説とのテーマの異同について質問があった。東日本大震災という現代の社会制度を大きく揺るがすような出来事を挟み作品傾向に変化も見られるため、各々の作品におけるテーマの相関関係の有無や変遷についても今後の分析課題としたい。

多和田やヤマシタの作品にみられるような、リアリズムでは説明不可能な幻想的な描写は、ノーベル賞を受賞したガブリエル・ガルシア＝マルケスをはじめとしたラテンアメリカ文学の作家たちが採用した魔術的リアリズムの手法と似通っている。今後は、亡命を余儀なくされた作家の作品との相違点にも着目し、自らの意志で海外に居住しなおかつ母語ではない言語で執筆・創作発表する女性作家たちの作品を対象に、ナショナリティやジェンダー、言語等の境界意識に関する表象の特徴について検討を試みたい。

また、今回の滞在中、報告者がかつて定期的に参加した文学理論・批評研究会(Taller de Teoría y Crítica Literaria Diana Morán)のメンバーである研究者・作家らと再会する機会も設けることができたため、南北アメリカの女性作家に関する最新の動向について情報を知り得ることとなった他、メンバーたちとの意見交換を経て、今般のような国際学会において発表することの意義深さを改めて認識することとなった。

2.3. 今後の予定

本学会での発表内容に基づき、さらなる考察を加えた論考について、英語での投稿先としてサンパウロ総合大学東洋学科紀要を考えていると同時に、前述の研究会メンバーから情報提供のあった来年以降に開催予定の文学理論・批評国際学会(VII Congreso Internacional de Teoría y Crítica Literaria)において、今回の発表内容をより発展させたテーマでの口頭発表を検討している。

最後に、ブラジルに滞在しつつ、本助成によりメキシコにおける国際学会で報告する機会をいただけたことに深く感謝申し上げます。日本を離れ、ともすれば自身の研究に対して焦燥感が募るなか、さまざまな研究者と議論することで今後に展望が開かれた実感がありました。選考委員の諸先生方に心より御礼申し上げます。

参考文献

- 有吉佐和子『ぶえるとりこ日記』角川文庫、1968。
 江種満子『大庭みな子の世界』新曜社、2001。
 大庭みな子『三匹の蟹』講談社文芸文庫、1992。
 小谷耕二編『ホームランドの政治学』開文社出版、2019。
 多和田葉子『雪の練習生』新潮文庫、2011。
 ——『献灯使』講談社文庫、2017。
 ——『雲をつかむ話／ボルドーの義兄』講談社文芸文庫、2019。
 ヤマシタ、カレン・テイ『熱帯雨林の彼方へ』風間賢二訳、新潮社、2014。
 与那覇恵子『現代女流作家論』審美社、1986。
 今福龍太＋カレン・テイ・ヤマシタ「作家のラティテュード（緯度＝自由度）」、『10+1』No. 11, INAX 出版、1997、pp. 158-172。
 饗庭孝男「荒地の抒情——大庭みな子論」、『三田文学』59[12]、1972年12月、pp. 32-41。
 Tawada, Yoko. *Schwager in Bordeaux*. Konkursbuch Verlag, Kindle, 2008。
 ---. *Memoirs of a Polar Bear*. Trans. Susan Bernofsky, New Directions, Kindle, 2016。
 ---. *Memórias de um urso polar*. Tradu. Lúcia Collischonn de Abreu, Gerson Roberto Neumann, Todavia, 2019。
 Wilson, Michiko Niikuni. *Gender is Fair Game: (Re)thinking the (Fe)male in the Works of Oba Minako*. NY: M. E. Sharpe, 1999。
 Slaymaker, Douglas. Ed., *Yoko Tawada: Voices from Everywhere*. Lexington Books, 2007。
 McClain, Yoko. "Ariyoshi Sawako: Creative Social Critic." *The Journal of the Association of Teachers of Japanese*. Vol. 12, No. 2/3, 1977, pp. 211-228。
https://www.jstor.org/stable/489167?seq=1#page_scan_tab_contents (2019/11/8 参照)

洲崎圭子：Beyond cultural diversity

すさき けいこ／お茶の水女子大学基幹研究院 研究員

- Beyond cultural diversity—The case of migrant Japanese women writers
- Keiko Susaki